Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-22

14世紀黒海沿岸におけるヴェネツィア人の活動 : キプチャク・ハン国君主との協約に注目して（二〇二二年度 神戸大学史学研究会コロキウム要旨）

古川, 凌丞

(Citation)
神戸大学史学年報,38:40*-42*

(Issue Date)
2023-06

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100485248

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485248

14世紀黒海沿岸におけるヴェネツィア人の活動
―キプチャク・ハン国君主との協約に注目して―

古川　凌丞

13世紀初頭にチンギス・ハンによって始まったユーラシア征服事業は、13世紀中頃には東欧に迫るほど拡大した。こうして誕生したモンゴル帝国は、拡大と共に事実上4つに分裂することになるが、法的には14世紀前半まで単一の帝国として存在した。この征服により、13世紀後半から14世紀前半、アジアと北アフリカ、ヨーロッパは1つの大きな世界経済に結合し、活発な東西交易が行われることになった。中でも黒海沿岸地域は、地中海交易網とアジアの内陸交易網の結節点として大きく繁栄した。特に、13世紀末にローマ教皇がマムルーク朝との交易を禁じると、ヨーロッパ人にとって黒海は唯一のアジアとの窓口となったのである。黒海沿岸で商業活動をしていたヨーロッパ人は、主にジェノヴァとヴェネツィアの商人であった。彼等は現地に居留地を建設し、現地を治めていたキプチャク・ハン国君主から特権を得て自治を行ったのである。

本研究では、主に14世紀におけるヴェネツィア人の居留地ターナに注目する。ヴェネツィア人は1333年にキプチャク・ハン国君主ウズベクと協約を結び、ターナで自治を開始した。ヴェネツィアによる居留地運営は1475年にオスマン帝国に侵略されるまで続いた。なぜ100年以上にわたり、ヴェネツィアはこの都市を管理できたのだろうか。

先行研究では、現地で活動するヴェネツィア商人についての経済史的、社会史的研究が主流を占めており、現地君主の存在に言及しているものはごく少数である。しかし、自治およびその他の特権を許可しているのはあくまで現地君主である。彼等へ視線を向けることは大きな意義があるだろう。本報告では、特に14世紀前半における歴代君主とヴェネツィアの協約の変遷を概観し、両者の駆け引きを考察する。

14世紀中頃までにヴェネツィアと協約を結んだ現地君主は、ウズベク、

ジャニベク、ベルディベクの3人である。ヴェネツィアにとってこの協約は土地の安全や自由な商業活動のために必要不可欠なものであった。ウズベクが死んだ際には、ヴェネツィアは現地調査のための人員を派遣したし、ジャニベクと紛争があった際には、長年の競合であるジェノヴァと協力して協定の再締結を求めた。彼等にとって、協定はターナでの活動において非常に重要なものであったのである。

さて、各君主との協約内容はどのように変化していったのだろうか。協定の構成は、大きく分けて「前書き」「協定の対象」「以前の協定内容に対する言及」「居住地について」「商売と税金について」「トラブルがあった場合の対処法について」という内容に分別できる。このことはいずれの協約でも一貫しており、税率以外は基本的に最初のウズベクとの協約がそのまま継承されていたことが分かる。

一方、各項目の詳細な内容は、時代が進むにつれて具体的になっていった。例えば、「商売と税金について」の内容を見てみると、1342年のジャニベクとの協約は、ウズベクとの協約に加えて未加工の皮革の商売について言及されている。さらに1358年のベルディベクとの協約では、荷車についての文言も追加された。「トラブルがあった場合の対処法について」に関しても同様であり、1333年時点ではコンスルがトラブル解決の責任を負うという内容だけであったが、その後の協約では、船が破損した場合の財産の所有権や、都市の見張りについてなど、内容が詳細になっていっている。これらのことから、協約の軸は変えずに、(おそらく種々のトラブルに対応する形で)厳密なルールを制定していった軌跡が見えてくるだろう。

また、ヴェネツィアはジャニベクとは2回協約を結んだ。というのも、先述したとおり、1343年から1347年にヴェネツィアとキプチャク・ハン国の間で大規模な紛争が起こり、両者の関係は4年間途絶えてしまったのである。前後の協約を見比べると、紛争後の方には紛争についての記述が加えられていることが分かる。さらにこの記述は、約10年後のベルディベクとの協約にも記されている。紛争が両者の関係にとって非常に大きな出来事であったこと、そしてそれを乗り越えて両者が元の関係を取り戻そうとしていたことが窺える。

以上、14世紀前半におけるヴェネツィアとキプチャク・ハン国君主の協約を概観した。協約は、当初のものを軸にしつつ、より詳細で厳密なルール

が制定されていった。紛争が起こった際、ヴェネツィアは協約の再締結を目標として行動したし、紛争が終わると、実際に協約を結び直して以前の関係の修復を図った。改めて、協約が両者の関係を規定するものであったことが理解できるだろう。

今後の研究では、14 世紀後半にも注目し、ヴェネツィアと現地君主との駆け引きを考察していきたい。また、黒海沿岸には他に、ジェノヴァ商人やビザンツ商人、トレビゾンド商人など、様々な人間が存在した。彼等がターナのヴェネツィア商人にどのような影響を及ぼしたのか、ということにも目を向け、修士論文の執筆へと準備を進めたい。